

いよいよ最終回である。小生の在学5年間(1939~1944)を紹介する。

1939(昭和14)年3月、入学試験の理科で、溶液を酸・アルカリに判定するテストが出された。

晴れて4月入学。明治時代に制定の角帽を被り、4kmの道を徒歩での通学が始まった。自転車などの乗り物は一切許されなかった。級長に任命され、先生の入退室時「礼」の号令をかけることになった。

育徳寮

1年生の2学期になると選ばれた10人の級友と家を離れて寮生活に入った。1年生の入寮はこれが初めての試みであった。4年生と2人ずつ4人一室で起居を共にした。昭和13年4月(私の入学前年)中村亀蔵校長により再建された育徳寮は、寮訓として「洗心」「和敬」「惜陰」の三つが定められ、寮生活の自律性を重んじた。浄らかな環境のうちに、少年らしい純情と敬愛の心をもって共に学び共に遊ぶ、自然で健やかな素直な協同生活を体験することができた。晴れて清々しい朝には、食事前に寮生一同散歩に出た。三々五々、翠松の間を錦陵歌を歌いながら歩いた。「不断の努力願わくは、不撓の意気に燃え燃えて、校史に光添えしめん、校史に光添えしめん」という歌声が今でも耳に残っている。夜は黙修後、集会室兼図書室に集まって挨拶を交わし、中村校長を始め、各科目担当の先生が交替で宿泊され、学科の授業を受けた。夜空に望遠鏡を覗き、土星の金環を見て、厳かな神秘の世界に触れ魂の驚きを忘れることができなかつた。北斗七星を仰いで、「孔明秋夜祭北斗」の話を聴き、カントの有名な「わが上なる輝く星空とわが内なる道徳律」の講義を受けた。国分寺の塔に登った後、今はただ一つ残る礎石を見て、その礎心の窪みに触ることができた。八景山、古墳群、甲塚の墓地に郡長正や秋月党の墓などを訪ねた。こうした恵まれた環境の中、同室の上級生は一高、東大へと進学して行った。今日でいうエリート教育だった。

台が原茶園

村野山人(元豊州鉄道社長、現平成筑豊鉄道)が所有地を学校の山林試植地として明治34年に5町4畝5歩(約11ha)を寄付。中村亀蔵校長により昭和11年12月23日第一回目の開墾が生徒の手によって開始され、夏休みを利用して本格的開墾が続けられ、私の入学した昭和14年11月には茶の栽培が行われた。「茶畑や 宇治にも優れ台が原」。師弟同行の労働体験の茶園には中村校長の「流汗鍛錬」の碑が建っている。

(右上へ続く)

創立記念日マラソン

5月5日の創立記念日の全校生徒によるマラソンは、明治40年ごろから始まっていた。校庭をスタート、国分の村落から竹並を走り、行橋一寺畔一天生田一彦徳を通過して帰校。

10マイルレースと呼ばれ、忍耐、辛抱、心に勝つことを教えられた。



夜行軍

毎年7月7日、日中戦争の始まった日に校庭を夕方出発、国分一祓郷一徳永一元永(須佐祇園社)一金谷一行橋一延永一黒田(小学校校庭で大休止、仮眠)一稗田一天生田一豊津に朝帰校する夜行軍は、時に眠りながら歩行し、休憩の合図と共に道路端に寝転んだ思い出が残っている。

英彦山登山

中学2年生の時、油須原で列車を降り、徒歩で赤村から津野を通過して銅の鳥居をくぐり、英彦山神宮の下に到着。

中央館、六助旅館、白梅旅館の3館に分宿、翌早朝、修験者山伏を思い浮かべながら鬼杉を経て頂上に着き、霞の中のはるか彼方に阿蘇の噴煙を眺めた。下山は鷹巣原から薬師峠、野峠を越え、帆柱一伊良原一横瀬一節丸を経て帰校した。一泊二日の長距離登山歩行だったが、落伍者は一人も出なかつた。

宮崎「八紘一字」の塔

昭和15年、紀元2600年を記念して宮崎にアジア各地から石材を集めて「八紘一字の塔」が建設され(今の平和台)、日豊線のSLに乗って煙を被りながら訪ねたことも懐かしい。

30キロ超の行軍

校庭を発ち、豊前松江の浄円寺(明治30年卒業し、東大で学んだ日本仏教済生軍の創始者=真田増丸さんの寺)までの長距離を全校生徒で往復した。

戦争突入

昭和16年12月8日、軍事教練の査閲中に真珠湾攻撃、太平洋で戦争状態に入った。学内に軍事色が深まり、学業半ばで航空兵に志願して行く同窓生も多く、特攻隊員として一命を国の捧げる学友が出た。理系に進んだ私は兵役を延期され終戦を迎えた。

文武両道、中学五年間正課で学習した剣道は86歳の現在も、稽古による幾多の障害に耐え、年に一度、3000名を超える高段者が集う京都大会で最高位範士の演武で「取り」を務めている。(完)

※ 由緒ある育徳館の角帽の由来は小笠原忠忱伯とともに8頁に記載されています。

※ 次回から「下関商業物語」が始まります。お楽しみに

【育徳館高校の学帽は角帽】

本校の名物「角帽」制定の詳しい経緯については不明であるが、畑功氏（明治25年卒）の回顧文に以下の通り記されている。

角帽の由来

＜私達が豊津の1年生のとき（明治20年～21年）小笠原忠忱伯（最後の小倉藩主）がお出になり、一夜入江校長と種々談合の末「将来は英語なり。さらば英国と言わず、手頃な米国より教師を輸入せよ、給料は拙者が出してやる」と言われ、これがハッバード先生聘用の糸口になり、御帰京後土産代として生徒一同に角帽を送って下さったのが角帽の始まりである。それまでは無帽である。思うに当時東京においてさえ中

学程度では決った制帽とてなく、丸帽は後になって世間で思いついた物だと思われる＞

小笠原忠忱伯はケンブリッジ大学（英）に留学され、当時の西洋文化を体得されており、その大学帽を在校生に下されたもので当時は生徒だけでなく、校長や職員も被っていたといわれている。



教師招聘と言い、学帽と言い旧藩主の自腹に拠っていた経営事情も窺える。

伯は明治30年35歳の若さで逝去された。